

不老不

亜梨亜

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

不老不 になった女と、それを赦 た世界のおはな 。

目次

不老不

1

不老不

むかむか、ある所に、一人の女がいました。

女はとても美しく、それはそれは沢山の男からの言い寄られていました。女も自らの美さを覚えており、数多の男を手玉に取り、自らの欲しいものを手に入れてまいりました。

まさに「傾国の女」。彼、よは自らの欲望にあまりにも忠つで、その為沢山の国や街が滅ぶこともありました。

そんな彼、よが最も求めたもの。それが「不老不死」でした。

か、幾ら美しい彼、よがそれを求めたとしても、世の理に反する欲望は、世界に生きるたかが人間では叶えようありません。人は死ぬ。それはあまりにも当然で、抗いようもない摂理であり、つなのです。

そんなむかむかのおはな。

女はまだ、生きていました。つまりこれはむかばななどではありません。或いは、一人の女の一生を綴る日記とも言えるのでよう。

彼、よに永久の命が与えられたその日、世の理は覆されることとなりました。何故な

ら、「生まれた以上、人はいずれ死ぬ」という覆されることの無い。つが、音を立てて崩れ去ったのですから。一つの問題が、よう失する、それがどれほどのことなので、ようか。その答えは、やがて訪れることとなりました。

彼、よの世界から、「死」が消え失せたのです。当然、不老不死なのですから、彼、よが死ぬことは有り得ません。か、それだけではありませんでした。彼、よの世界から、「」が完全に消え失せたのです。言葉の意味だけでなく、音が、存在そのものが消え失せるなど、あるはずがないというのに。それほどまでに、「死」という概念は世界に於いて大きな存在であり、死、てはならない絶対的な、よう徴だったのです。

抜け落ちた記憶、消え失せた概念。音は無へ還り、文字通り彼、よの世界は一つの「死」を迎えました。文字通りと言えど、その文字すら思い出せない、存在を、らない、そんな文字なども無いというのに。

たった一文字が消えただけで、彼、よの世界は歪みはじめました。言いようもない違和感、りも、ないものに犯されていく恐怖、無に、ん臓を掴まれている感覚。死を超越した筈の彼、よを恐怖におと、いれたのは、消え失せた概念という名の死でした。

或いは、消えた概念がたった一つの言葉だけで良かった、というべきなので、ようか。これが仮に「death」だったと、たらどうで、ようか。彼、よの精、んは更にすり減っていたかも、れません。

一つ概念が消えた反動は、それだけではおわりませんでた。

彼、よの「生きている」世界はいつの間にか切り離され、新たな理を生みはめたのです。か、それに彼、よが気付くはずありません。世界とは常に様相を変え、誰もらないうちに別のものへと変貌するのが常なのですから。

いつの間にか、彼、よの生きる世界は、新たな生命が生まれなくなりました。

永遠に訪れることの無い「死」。消えた概念が訪れるはずありません。そこでその消えた概念の逆に位置、ていた概念、即ち「生」も消え失せてしまったのです。

新たな命が生まれることが無い。その、つは当然ながら彼、よに降り掛かった概念の変貌ではなく、世界そのものに掛かつて、まった概念の変貌です。彼、よから死を取り除いた結果、世界から生が取り除かれる。そこで、いずれはどうなるか。答えは明白です。

世界から、死が取り除かれました。

今ある命が消えることがなく、新たな命が現れることの無い世界。世の理をうなつた世界。彼、よは「傾国の女」では無くなりました。世の理すら、傾けて、まったのです。

そして生と死の概念の両方を失ったこの世界。最後に失うのは「命の価値」という概念だと言わざるを得ないでしょう。世界にも寿命、命、終わりがありません。その世界の命すら価値が揺らいでしまうとあれば、この世界に存在する全ての概念が傾くこととなり、その姿、音、あらゆるものが消失してしまおうでしょう。

それでも、最初に死の概念を失った彼女は、消失して尚死ぬことはありませんでした。全ての概念を失って尚、死ぬことは赦されませんでした。全てを求め、あらゆるものが手に入り、世界の理すら捻じ曲げて手に入れた不老不死の代償は、それ以外の、或いはそれすら含めた全てでした。

しかし、尚も彼女は求め続けるでしょう。全てを失った筈の、言葉も、思考も、身体も、存在という概念すら失っていくようですが、彼女は求め続けるのです。何故なら、彼女はただ一人、この世界で死していませんから。

彼女は求めました。

「死ね」